


 書評

Barnhill JW 原書編集, 高橋三郎 監訳, 塩入俊樹, 市川直樹 訳 DSM-5® ケースファイル

寺尾 岳

この本は、コーネル大学医学部性精神科の Barnhill 教授による『DSM-5® Clinical Cases』(2014) の日本語版である。岐阜大学大学院精神病理学分野の塩入俊樹教授や市川直樹先生など 10 数名の先生方が翻訳され、高橋三郎先生が監訳をされた。

この本を読み終わった時に、訳者の先生方の翻訳に対する情熱と惜しみないご尽力に感服した。それは本書には訳のぎこちなさも訳文の分かりにくさもほとんどないからである。そもそも原本で取り上げられた症例が素直な定型例ばかりではなく、そうでないものが結構含まれている。しかもそれぞれの症例は、診断を確定するためのすべての情報を含んでいるとは限らない。これらの変化球をなんとか、ストライクゾーンへ持っていく訳者の苦労は大変なものであったと推察する。それぞれの先生方は日常診療にお忙しい中で、相当な労力と時間を費やされたに違いない。それに加えて、訳者の心優しい配慮も随所にみられる。たとえば、マーサズ・ヴィニヤードや聖杯など、日本人になじみの薄い言葉にわかりやすい訳注が付けられている。以下に、読後感として印象に残ったことをいくつか挙げたい。

まず、各章の成り立ちとして、イントロダクションがあり DSM-5® への変更の眼目が解説されている。その後に、症例が示され、診断、考察、文献と続く。診断のところには、診断名とともに、『マニュアル』と『手引き』のそれぞれ何ページに診断基準が掲載されているかが明示されている。したがって、本来は診断基準を他の本で確認しながら、この本を読むことが想定されている。先にも述べたように、症例自体は素晴らしい訳によりスムーズに読み込める。しかしながら欲を言えば、寝転がって小説を読むような感じで症例を読み込んでいく楽しさを想定すると、改訂の際には、それぞれの診断基準を何らかの形でこの本に包含していただければと希望したい。原本との整合性から無理かもしれないが、

検討していただければ幸いである。

次に、翻訳の対象とされた 19 の障害群は、すべてに興味深い症例呈示と解説が施され、丁寧に訳されているため、新しい疾患概念であっても理解が促進される。たとえば「身体症状症および関連症群」を取り上げると、そこには新しい疾患として身体症状症や病氣不安症が具体的な症例とともに呈示される。身体症状症は、苦痛を伴う身体症状があり、そうした症状に対する反応を有する患者の一群を表し、病氣不安症は身体症状を有さないが健康への強い不安を有する患者の一群である。従来の心気症の多くは前者であり、一部は後者であったという。いずれにせよ、患者にとっては「あなたは心気症です」と言われるよりは、「身体症状症です」とか「病氣不安症です」と診断されたほうがよほど腑に落ちるであろう。

「食行動障害および摂食障害群」の中の回避・制限性食物摂取症という新しい疾患も、具体的な症例とともに提示されているために分かりやすい。食べ物を制限したり回避したりすることで意味のある障害を招くが神経症性やせ症の診断基準を満たさない人を記述できることで、この疾患の臨床的有用性は高いと思われる。

最後に、DSM-5® が患者の苦痛と機能不全に大きく焦点を当てており、誰も苦しんでいないか、誰も悪い影響を受けていない時には疾患は存在しないという思想がいたるところで強調されているのは、刺激的かつ魅力的である。

この本が DSM-5® の変更された診断基準のみならずこのような大胆な思想を適切に教示する症例集として、多くの日本人読者の役に立つことを確信している。

(大分大学精神神経医学教授)

●A5 448 頁 2015 定価：本体 6,000 円＋税
医学書院刊